

そして俺は幾度となく
間違いを繰り返す。

めろんぱん@

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作からの分岐で、修学旅行が終わった翌日からの話になります。

地の文が多いかもしれませんが。

初心者ですので、誤字脱字などがあれば感想にてご指摘頂ければ幸いです。

タグのアンチ・ヘイトなどは一応、予防線として入れてます。

【追記】 シリーズ名を修正しました。

目次

プロローグ	1
遭遇	7
依頼	19

プロローグ

プロローグ

『…あなたのやり方、嫌いだよ』

『人の気持ち、もっと考えてよ…』

修学旅行を終え、無事帰宅してからというもの、別れ際に二人が放った言葉が耳からこびり付いて離れない。

俺は、何か選択を間違えたのだろうか。

席に着くなり、机に突っ伏し、特に音の流れてこないイヤホンを耳に装着する。

少し状況を整理してみよう。

竹林と灯籠が創り出す、幻想的な雰囲気の中、戸部を遮つての嘘告白。

あれは、欺瞞に満ちたあの状況を、解決に導いてくれるような好手では無かったかもしれない。もっと他に、周囲が納得して円満に解決するような策があったのかもしれない。

だが、それは結果論というものだろう。結果が出てしまった、既に終わってしまったからこそ他の策を模索できるのであり、ひいては俺のとった行動を否定できるのである。

あの状況。関係性を変えたい依頼者がいて、関係性を変えたくない依頼者がいた。：落ち着いて考えてみれば分かる。

2つの条件を同時に満たすなど、できるはずが無いのだ。

故に、俺はあの事態に直面したとき、問題の解消という手段を選んだ。それが自分の、『比企谷 八幡』の打てる最善の手であり、最も効率の良い手だと判断したからだ。

自分を否定した『雪ノ下 雪乃』。その姉、才色兼備、傍若無人とも評される彼女ならば、また違った未来を提示できたのかもしれない。

だが、それでは役者が違う。駒が違うのだ。

ある状況下における好手とは、誰にでも指せなければ好手ではない。

∴将棋で敗北しそうなとき、状況を解決したいからといって、Queenを打ち込むことなど、できるはずがないのである。

よって、あの状況下における俺の判断は悪くは無かったはずだ。

事実、葉山グループは何事もなく、今日も歓談の真つ最中のようだ。あつ、戸部は煩いからもう少し声の音量を下げて過ごしてくれてもいいんですことよ？いや、戸部の場合、発言回数もずば抜けて多いんだよな。いつ見ても、つべつて言ってるし。なんなの？もしかして発言する度にお金でも貰ってるの？なにそれ、羨ましすぎて無口になるまでである。…それは元からってツツコミは無しでオナシヤス！

話は大幅にズレたが、やはり俺の取った行動が糾弾される謂れはない筈である。ましてやあの二人は、今回の依頼に關しては俺より貢献度が低いと言えるだろう。その上、実質的に依頼を引き受けると宣言したのは俺ではない。他ならぬ彼女たちなのだ。

そう奉仕部の二人に恨み事を募らせていると、根本的な疑問が浮かび上がってきた。

「…なぜ俺は、他人に否定されたくらいでこんなにも悩んでいる？」

他人に肯定され、他人とコミュニケーションを取り、他人だらけのコミュニティに属

す。

そんなモノは高校に上がる際に見限ったはずではなかったのか。途端に自分が情けなくなり、ガリガリと頭をかく。

いつの間にだろう。

俺は、奉仕部の二人に依存し、中学のときのように身勝手な理想を押し付け、そして期待していたのだ。

ーもしかしてこいつらは、俺を理解してくれているのではないかと。

そんなつまらない、ちっぽけな幻想。

そんなものに価値などありはしないのに。

それに気づいた俺が、奉仕部に通うことは二度と無かった。

遭遇

退屈だった1日が終わり、俺は教科書をのそのそと鞆にしまうと、目を閉じて寝たふりを始めた。

別に、修学旅行の疲れが残っていて早く帰って寝たい……とかいうわけではない。

いや、まあ本音は愛しの妹である大天使コマチエルの待つお家に飛んで帰りたいんですけどね？

あ、でもこの前、雪ノ下に用事があつて部活が休みだった時、家にすぐ帰ってごろごろしてたら、『ごみいちゃん、小町はシュークリームの気分なのです』とか言われて追い出されたな。

あれ？もしかして俺って家にも居場所ないの？大事な兄を気遣えないとか、それ八幡的にポイント低いよ？てか、なのです口調でシュークリームを要求とか、それどこの羽

入だよ。なんなの？昭和58年から先に進めないの？

「修学旅行が終わったばかりで、気が緩んでるやつも多いと思うが、寄り道とかするなよ、じゃあ解散！」

バカな事を考えていると、いつの間にかHRが終わっていたようだ。

鞆を手に取り、足早に教室を出る。急がないと由比ヶ浜が話しかけてくるかもしれないからな。

さっさと家に帰って、録画していたぶりていできゅあきゅあなアニメでも見よう。可愛い女の子が頑張ってるってだけで涙が出てくるよね。

…やだ、俺って父性にあふれすぎ？そろそろマザー・テレサと並んでファザー・ハチマンと呼ばれるまである。いや無いな。

そんな、どうでもいい事を考えながら昇降口に向かって歩いていた所為だろうか。俺

は、ステルス八幡を看過され、声をかけられてしまった。

「あれ？比企谷君だ！」

めぐりつしゆの使い手、めぐ☆りんこと、城廻めぐり先輩である。

「……こんにちは」

俯きがちに、軽く挨拶を返す。少し時間ロスになるかもしれないが、由比ヶ浜は、まだ教室で三浦たちと話しているはずだし大丈夫だろう。だが城廻先輩は、そう気持ちをとり直した俺に衝撃を与える発言をした。

「ちようど良かった！私ね、今から奉仕部にお問い合わせしに行くところだったんだ！」

少し戸惑い、顔を上げると先輩の後方に一人の女子が立っているのを見つけた。奉仕部への依頼者なのだろう。目が合うと、私困ってますオーラを出しつつ、上目遣いで見えてきた。

その姿に、俺は反射的に警戒を強める。

恐らくこいつは俺の苦手とするタイプだ。可愛さを作り、周りを動かし、その幸せを享受する。

関わりたくない。というか俺はもう奉仕部に行くつもりはないのだ。

「…すみません、今日是用事があるので奉仕部には行けないんです」

そう断ると城廻先輩は、しゅん…と残念そうな顔をした。

「そっかあ…。じゃあ仕方ないね！明日は大丈夫？」

大丈夫じゃない。

「いえ、実はしばらく奉仕部にはいかないつもりなので…」

「え？どうしたの？…何か重い病気？」

「いえ別に。俺はいいませんが、奉仕部はやってると思えますよ」

「うーん…。体育祭の時とかすごく頼りになったから、できれば比企谷くんをお願いしたかったの…」

…面倒だな。しつこい子は嫌われるんだってハチマン知ってるよ？ソースは俺といふたーねつと。すごい、いんたーねつとにはなんでも書いてあるなー。

「依頼については、あいつらだけでも十分かと」

「そっかあ…。分かった奉仕部に行ってみるね。比企谷くんもできれば後から手伝って欲しいな」

「…善処します」

返事をして歩き出すと、「ごめんね一色さん、じゃあ行こっか」という声が聞こえた。これで大丈夫だろう。明日あたりに平塚先生に呼び出されるかもしれないが、そんなものどうにでもなる。

早く家に帰ろう。そしてアニメでも見よう。

そう思い、家に急ぐ俺は違和感があったにも関わらず、深く追求することもなかった。

——だから気付けなかった。

癒しの存在となっていた城廻先輩でさえも、疎ましく感じていた事実。

城廻めぐりside

比企谷くん、どうしたんだろう…。

前は嫌々でも真面目に仕事してたから、引き受けてくれると思っただけだなあ。

仕方なくそのまま奉仕部に向かっていると、後ろを歩いていた一色さんが声をかけてきた。

「あのお、城廻先輩…、今のつて…」

不安なのだろうか。まあ比企谷くんつてパツと見た感じは頼りなく見えるし。仕方ない。ここはお姉さんが誤解を解いてあげよう！

「今の男の子のこと？あの子比企谷くんつて言うんだよ！すつごく頼りになるの！」

胸の前で握り拳を作りながらそう教えてあげる。だが、一色さんから帰ってきた言葉は予想外のものだった。

「いや、そうじゃなくてですね…。あの、なんというか…」

ん？どうしたのだろうか。もしかして知り合いさんなのかな？だとしたら挨拶させてあげれば良かったかな。

けれども一色さんは、怯えたように細々と呟く。

「あの人、最初に目があった時からと言いますか…、こっちの事がまるで見透かされているかのように怖いです。理由はわからないんですが…」

どうやら知り合いではないみたい。

比企谷くんって怖いかなあ。でも何か今日は様子がおかしかったような気がする。まあいつか！これから奉仕部に行くんだし、雪ノ下さんたちに聞けば分かるよね！

「今日は体調でも悪かったのかなあ…？いつもはすつごく優しい子なんだけどね。少し捻くれてるけど！」

一色さんは、あまり納得していない様子だったが、それでも頷いてくれた。

「じゃあ、行こっか！ れっつご〜！」

「…お、お〜！」

頼りになるのは比企谷くんだけじゃない。

部長の雪ノ下さんだってそうだ。いつもでも真剣に物事に取り組んでいるし、文化祭での実務方面の能力は凄かった。それに、あのハルさんの妹だ。比企谷くんに向けるのと同様に、私は密かな信頼を寄せていた。

もちろん、由比ヶ浜さんだって頼りにしている。文化祭や体育祭ではクラスとの仲を取りもち、繋いでくれていたという。実は争いごとを収める事ができる人、そもそも争いが起きない空気を作れる人と言うのはかなり重宝するのだ。これは私の経験則だよ！

そういえば、奉仕部の仲間も由比ヶ浜さんがいる事で、うまく回っている感じなのかな。ううん、きつとそれだけじゃない。奉仕部は、あの3人であるから。あの3人だからこそうまくいっているのだろう。きつと、それは誰か一人欠けても成立し得ないもの。

あの3人には私なんかでは立ち入れないような物が確かにある。

思わず微笑みが溢れる。

…何も心配する必要など無いだろう。

これまでも助けられてきたのだから。

そして私は依頼者である一色いろはさんを救うべく、奉仕部の扉をノックした。

——そこにはもう、あの居心地の良い空間は無い事など知らずに。

依頼

『あ、雪乃ちゃん、ひゃっはろ〜！今日は珍しく電話に出てくれたんだね。…え？何の用かだつて？雪乃ちゃん、今日まで修学旅行だったんでしょ？だからお土産を貰いに行こうかなあ〜つて！』

『…うん、それで？え〜！もう宅配便で送っちゃった？この距離ぐらいなら私が取りに行くから良いのに！ぶ〜ぶ〜！』

『え、私にマンションに来られるのが嫌？酷いなあ…、お姉ちゃんは悲しいよ…』

『それはそうとさあ…、雪乃ちゃん何か隠してない？』

『何も聞いてないよ？…ただ、雪乃ちゃんの状態が少しおかしいかなつて♪』

『ふーん…？もしかして修学旅行で何かあったの？………比企谷くん関連で』

『正解なんだね。雪乃ちゃんは嘘つかないもんね〜!』

『で?……内容、教えて?』

私、城廻めぐりは……とても恥ずかしい思いをしていた!

なんで今日に限って鍵がかかっているの……。一色さんの前でれつつごく〜!とか言っちゃったよ。

ああ、恥ずかしい。顔が紅に染まっていくのを感じる。

「えと、城廻めぐり先輩、部員の方が来るまで待ちますか？」

「う、うん。そうだね」

これが比企谷くんが言ってた、黒歴史つてやつなのかな…

確かに思い出すたびに、悶えてしまうのも分かる気がする。

ちなみに筆者さんの黒歴史は、数学で100点取ったと思って自慢してて、返却されてみたら欠点だった事なんだって。

ほんと恥ずかしいよね！

そんなメタいことを考えてたら、由比ヶ浜さんが歩いてくるのが見えた。あれ？平塚先生も一緒にいるみたい。なんでだろ。

由比ヶ浜さんは少しぼーっとしているのだろうか。目の前まで来て、私の存在に気付いたみたい。

「…あれ？城廻先輩どうしたんですか？」

「由比ヶ浜さんこんにちは！あ、えとそのね、生徒会選挙関係でちよつと依頼があつて…」

そう伝えると、由比ヶ浜さんの後ろにいた平塚先生が口を開いた。

「依頼というと…」

「はい、ここにいる一色さんの事です。どうも本人の意思とは別に立候補させられてたみたいで…」

選挙管理委員の不手際、と言われてしまえばそれまでなのだが、今回は少し事情が特殊なのだ。過去にもこんな悪戯はあつたようだが、ただのおふざけであつたので早いう

ちにデタラメだと判明したらしい。

だが今回は、推薦人名簿の署名が本物だったのだ。正直、私たち選挙管理委員会はみんな意欲がある人ばかりだし、悪戯にしても推薦人を30人も集めるなんて考えてなかった。

それを聞いても良く理解ができなかったのだろう。不思議そうな顔をしている由比ヶ浜さんに、こつそり内容を教えてあげた。

ふむふむ、と真面目に話を聞いてはくれるが理解してくれているかは微妙だ。良い子なんだけどなあ…。

「立候補を取り下げるというのも出来ないようだし、これから対策を考えるしかなからう。しかし雪ノ下が来てないのではなあ…」

…え？今なんて？雪ノ下さんがいない？

なんで？そう尋ねようとするが、顔がこわばってしまい、うまく声が出せない。

もしかしたらただの体調不良かもしれない。その可能性がある事にも気づいているが、なぜか嫌な予感がする。

私が驚いているのを見たのだろう。

由比ヶ浜さんが、平塚先生の発言の補足をしてくれる。

「ゆきのん学校休んでるみたいで…それも無断で」

どうしてもその発言から感じ取ってしまう、無視できない違和感。

ー雪ノ下さんが学校を無断で欠席？

当然、私は雪ノ下さんがどんな人なのかはあまり知らない。だが、いつもの立ち振る舞いを見るに、少なくとも学校を無断で欠席するような人ではなかったはずだ。

「雪ノ下なら担任に連絡を入れて、顧問である私にも電話してくるはずだからなあ…。部員である由比ヶ浜も先ほどまで知らなかったようだし、どうしたものか…」

平塚先生が私の気持ちを代弁してくれる。

何かがおかしい。私の知らないところで何かが決定的にズレているような感覚。

黙り込んでしまった私を見かねたように、平塚先生が場を取り直そうとする。

…だがもう遅いのだろう。

「そういうえば、比企谷はどうした？姿が見えんようだが…」

「あたしより教室を早く出たので…。あ、もしかしたらMAXコーヒー買ってるのかもーほら、ヒッキーあれ大好きだし！」

そう、比企谷くんも来てないのだ。思えばあの時、比企谷くんの様子もおかしかったような気がする。

とにかく、2人にその事を伝えなきや。

「あの…、比企谷くんならさつき用事があるって言って帰っていくのを見ました」

そう言うと、由比ヶ浜さんが何かに気づいたかのように顔色が変わる。

…やっぱり何かあったんだ。確か昨日は修学旅行に言ってたはず。私は生徒会長だから、それくらいの行事は他の学年でも把握している。

だが平塚先生は気づいていないみたいだ。

「比企谷はサボりか…、全くふざけてるな。疲れが残っているのだろうか…」

サボりじゃない。比企谷くんがそんな事をするはずがない。確かに面倒だという態

度は取っているけど、いつもなら嫌々でも来ているはずだ。

…いつもなら。

「あ、あの城廻先輩、今日はその…」

「…うん、今日は一旦帰るね。」

「はい…すみません」

由比ヶ浜さんにお辞儀をして、そのまま一色さんを連れて昇降口に向かう。

こんなものだっただろうか。文化祭の時に雪ノ下さんが休んだ時は、由比ヶ浜さんはすぐにお見舞いに行くと言ったはず。

…やっぱり何かあったのだろうか。

奉仕部には本当にお世話になった。これからもあの3人には仲良くして欲しい。自分にできることは何なのだろうか。

そう考えながら、私は帰路に着いた。

『もしもし、どうしたの？めぐりから連絡してくるなんて珍しいね〜』

『え、相談？…いいよ〜！めぐりのためならお姉さん頑張っちゃうよ〜！』

『…雪乃ちゃんが学校に行ってなかった？それに比企谷くんが部活を何か理由があつて休んだみたい？』

『ほうほう。ただこれだけじゃ私でも理由は良くわかんないなあ〜…』

『ん？多分だけど、修学旅行で何かあったみたいなの？』

『そっかそっか。もう修学旅行の季節なんだね。忘れてたよ〜！』

『うん、とりあえず私が話を聞いてみるね！教えてくれてありがとう！バイバイ！』